

槐かい

平成29年6月号

岡井省二創刊

平成二十九年六月一日発行 第二十七巻第六号 通巻第三二二号（毎月一回）一日発行
平成三年九月十八日第三種郵便物認可

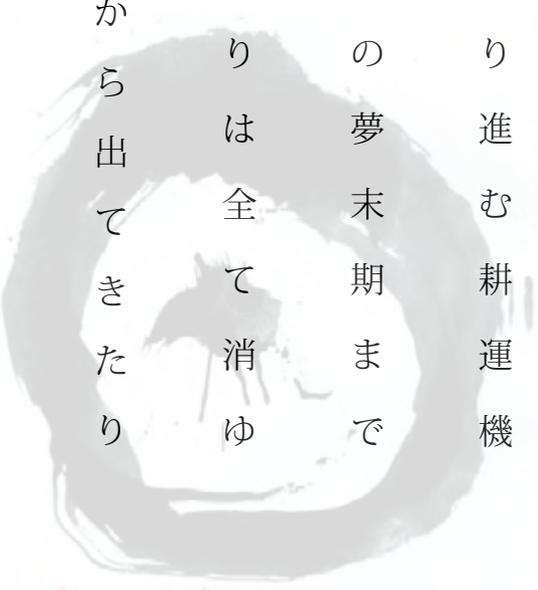


槐安の夢

高橋将夫

かうしてはをれぬと雪のとけてゆく
春の塵思考回路の隙間にも
手を貸せぬことの一つに猫の恋
佐保姫にさへも渡せぬ命なり

舌先は臙の味を知つてをる
のどかさや休むことなき子の遊び
長閑さやゆつくり進む耕運機
あなかしこ桃園の夢末期まで
花万朶死ねば周りは全て消ゆ
槐安国の蟻も穴から出てきたり
あの中で春風の吹く星はどれ



槐安集

水野恒彦

引鶴に星の光芒見て啼けり
梅曼陀羅に白雲動き薄れゆく
大紫にふつと触れたる白日夢
蜃楼かいやくらあまたの焚書ふんしよあつめたる
幽明の見えかくれして落椿

加藤みき

大とさかの鶏らしき春の昼
春筍の肌しろじろ神のいろ
眼張らに海洞のこゑ届きたる
べんちやらににこにこ顔や四月馬鹿
すみよしの電車道なり夏に入る

中島陽華

啓蟄やもだま酢味噌といふがあり
回春や大日さまを目の当り
だいすきは母の口癖山笑ふ
梅が香や手水の鉢は碓磝貝よ
寒明やトロンボーンと笑む少女

竹内悦子

ものの芽や武士の影ありにけり
紅梅や白梅や牛の背に五円玉
夜の雪朝あしたの月のひかりかな
八角山口周防 阿弥陀寺 百十度の石風呂の屋根の石風呂寒玉子
啓蟄や土管工事のはじまりぬ



雨村敏子

言の葉のさらさら流る雪解川
雪解水の一水となり野を走る
白椿考のくにて眠りける
あすに続くけふでありけり雛飾る
雛の夜の音なかりける雛しかな

本多俊子

海原に光散りばむ雛祭
啓蟄やきのふと違ふ日の匂ひ
春風の硯の海を渡りけり
人間に聞こえぬやうに亀鳴けり
わたつみに銀の針降る弥生かな

近藤喜子

太古より歩き続けてきたる蜷
たまきはる命つらねて鶴引けり
椿落つ水に明暗ありにけり
春愁やひよこに鶏冠ちらと生え
心髄に奔流の音する桜

瀬川公馨

魂乞の斉王なれど比良八荒
めらつめらつと如月の青不動
砂漠にてマーチリリーの悪の華
あしかびの上をトトトと日差しかな
ホルンにハーブなくて七癖花ミモザ

久保東海司

裁ち 鋏 大きく 使ひ 祭 笛
砂 八方 東 風 鳴る 空を 昏め 飛ぶ
早春の 風に 花あげ 野 水仙
梅なんと 沖の 白波より 白し
雪 晴れの 夜につづきし 星 青し

柳川 晋

一切といふほどでなし 芝を 焼く
終日 隠り 脳内 春 田 打つ
千年の 雛は 讓位 すら できぬ
春日 影 阿修羅の 奥に 別の 貌
鳥雲に入れば 帰ると 思はるる

熊川 暁子

村人は 義理の 貸し 借り 木の 芽和
陽炎を 袋 小路に 追ひ つめる
国中の 一年生に 桜 咲く
喪の 服の 花びら 払ふ 男かな
河鹿 笛 棘ある ものも 抜ける 如

寺田 すす江

海わたなか中に 溺れて いたり 大 浅 蜷
蛇穴に出でし 大 氣に たじろぎぬ
たちまちに 焼野 となりぬ 芒原
鷹鳩と 化して 更なる 高みへと
箒目に 落下の 椿 拾ひ あぐ

岩下芳子

仙人の食み残したる遠霞
山水の庭を借りたる小灰蝶
学帽を空高く上げ卒業す
杉花粉目から鼻へと突き抜ける
麗らかや麒麟の首と象の鼻

近藤紀子

囀に予感のありし目覚かな
明智門くぐるや春の水音あり
佐用姫の赤き鼻緒に春霞
中空に鳶の輪地には貝母かな
若布^{めの}あぶるわが手いつしか妣の手に

岩月優美子

束の間のあれはまぼろし蜚蝶
白鳥の帰りし水面虚しけれ
円墳を出てそれからの蛇の道
張りぼての白象居なくなり涅槃
春燈の揺らめく水面長恨歌

竹中一花

三方に山幸海幸春祭
水送り闇に瀬音と火の音と
黒猫を抱き直すや御忌小袖
錦湯を訪ねてをりし御忘詣
念佛は空也のこゑや春の川

前田美恵子

道場に竹刀の音や春浅し
囀の止みて木立の多さかな
春闌くや積木崩るる音のして
寒戻りほんの些細な行き違ひ
明智門入るやたちまち時鳥

中田禎子

ものの芽やコロポツクルの動き出す
春一番地球の少し軽くなる
鳶職の春の大空駆けめぐる
一服を天にふかして春野かな
鯉跳ねる落してゐたり春惜しむ



槐市集

有松洋子

大き風連れてつばくる岬過ぐ
三面鏡きのふとけふと春霞
絵の中の道をとびだし卒業す
暗闇にふいの足音花吹雪く
万灯日考に恋の夜いくたびか

犬塚芳子

春よ春静かに一と日暮れにけり
神々に届けとばかり梅香る
水掛不動等身大なり蝌蚪の紐
松ぼつくり転がり落ちて竜天に
お中日見馴れぬ鳥が庭に来て

犬塚李里子

蓬萌え梅林の裾さはやかに
引鶴の遠嶺に向かひ羽搏きぬ
巨き鳥はばたくさまに春の雲
光年を隔てひよつこり春満月
白梅の咲き満ち宇宙静けきよ

井上静子

春耕やいつしか刻の移りける
妖精の仕業と思ふ春の雪
反抗期ひいなの前であかんべえ
久しぶりの客をもてなす桜鯛
斑雪や青春切符ひた走る



今井 充子

寒牡丹菫の中にて笑まひけり
春満月足なみ合はせ付みて来し
春光や翳す指間の透けてをり
春一番ボデイカバーを巻き揚ぐる
惺石川兵衛先生
海兵の学徒は大樹さくら散る

岩田 洋子

啓蟄やブラウス一枚新調す
いぬふぐり庭に根つけば草ならず
保育の子全員泣きて山笑ふ
春光や路傍の石の形よく
強東風や七堂伽藍越えゆきし

江島 照美

霾やうつろ広がる石の棺
夢なくば虚しき心クローバー
山笑ふ大道芸の猿のこゑ
紅白のやはらかき雲梅の山
風吹いて恋知らぬまま鳥帰る

岡田 桃子

土蔵なる三人官女のほうれい線
曼陀羅 凶当麻印度と遡る
庵主様の膝痛彼岸のお数珠繰り
かげろへる念仏道場尊徳像
春フード深く開店プラカード

荻 布 貢

五十鈴川白木の橋の風光る
春場所や眞眞の幕内三枚目
鳩遊ぶ昼の修二会の舞台かな
惜春の青春十八切符買ふ
梅林や唯心論を考へる

久保 夢 女

あやされてくすぐられぬて雛の宵
雲を置き春を始動の雑木山
春帽子きめて歩みの歌ふごと
達者かと問ひて問はれて春の山
背伸びして花二分咲きの明日をかぐ

槐集

高橋将夫選

除かれし種の無言や種選 大阪 有松 洋子

暮れてキリンは春愁のシルエツト

未来へとたんぼの絮別れゆく

さらさらと刻をこぼせる山桜

春うららピンクの尾つぼが生えさうな

天帝の手の内にあり春遠し 岡崎 柴田 靖子

風神雷神競ふかに春一番

日輪をふところにして福寿草

春の虹何かさがして広野行く

闇にいてももの芽の声どこそこに

レコードの揺らぎの中のあたたかさ 大阪 江島 照美

蟻の道想定外のアートかな

ペランダの蟻も蜥蜴も穴を出づ

流し雛俵の舟に身を寄せて

迷ひ路を春一番に押されけり

金色の経文ひらく春の月 大阪 平野 多聞

春立つも春遠き国砂の国

路の臺夜半の雨の置きしとも

心中の神か悪魔か亀の鳴く

山笑ふ愛国心の裏表

飛梅の言霊まとひ光りをり 大阪 藤田美耶子

御仏は少年のほほ春愁

薄氷に風の彫刻生まれけり

会ひたいと言ふ人のある暖かさ

雨風を味方につけむ母子草

森深く消ゆる道あり辛夷咲く 岡崎 吉田 順子

蝌蚪生れて水面の雲を散らしけり

春光に手庇し欲しき磧かな

蒲公英の絮の弾けて小宇宙

引き鶴や天のまほらに一声を

銀河往来 高橋将夫

◆槐集観照

未来へとたんぼぼの絮別れゆく 有松 洋子

たんぼぼの絮が風に吹かれて飛んでゆく景。飛ぶ方向が未来というもさることながら、「別れゆく」がいい。たんぼぼの絮はそれぞれの未来に向かって飛んでゆくのだ。

〈除かれし種の無言や種選〉の句が選句に重なって見えた。選に入らなかつた理由は何だつたのだろうか。採られなかつた側にも言い分はあるだろうに。

〈さらさらと刻をこぼせる山桜〉は「さらさら」のオノマトペが効いており、〈暮れてキリンは春愁のシルエツト〉は「キリンのシルエツト」が新鮮。〈春うららピンクの尾つぼが生えさうな〉はユーモラスな一句。

春の虹何かさがして広野行く 柴田 靖子

虹がかかる春野。何か起こりそうな期待に胸を膨らませてどんどん歩いて行く。春の虹の本質を捉えている。〈風神雷神競ふかに春一番〉、〈日輪をふところにして福寿草〉もそれぞれ「春一番」ご「福寿草」の核心を突いている。

レコードの揺らぎの中のあたたかさ 江島 照美
レコードは平らなのに、回転するとゆらいで見える。その揺

ぎに春のあたたかさを感じ取った。作者ならではの感性。C Dでは感じ取れない世界。

〈流し雛依の舟に身を寄せて〉は「俵の舟に身を寄せて」の着眼がいい。句の姿がいい。

春立つも春遠き 国砂の国 平野 多聞
砂の国の春は遠いという。アラブに四季は無いが、有ったとしても、まさに春は遠い。〈金色の経文ひらく春の月〉〈露の臺

飯半の雨の置きしとも〉〈心中の神か悪魔か亀の鳴く〉〈山笑ふ愛国心の裏表〉、どの句にも作者ならではの視点と発想がある。

会ひたいと言ふ人のある暖かさ 藤田美耶子

会いたい人がいる人は幸せだ。会いたいと思ってくれる人がいる人もまた幸せだと思う。〈飛梅の言霊まとひ光りをり〉は道具の和歌をまどっている。〈御仏は少年のほほ春愁〉は阿修羅像を想起させる。〈薄氷に風の彫刻生まれけり〉はたしかな写生。〈雨風を味方につけむ母子草〉には思いやりがある。〉

森深く消ゆる道あり 辛夷咲く 吉田 順子

深く入れば入るほど道は見えなくなるのかもしれない。それはともかく、きれいな辛夷が咲いていてよかった。

告天子いのちの声に名乗り出づ 犬塚李里子

天の声を聞いて名乗りを上げた雲雀。揚雲雀にびつたりの情景といえよう。〈以下略〉